

# 山吹町の殺人

平林初之輔

青空文庫



## 一

男の顔にはすっかり血の氣<sup>け</sup>が失<sup>う</sup>せていた。ふらふら起<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>つて台所へ歩いてゆく姿は、まるで幽霊のようだった。出来るだけ物音をたてないように用心しながら、彼はそつと水道の栓<sup>せん</sup>をねじつて、左手の掌<sup>てのひら</sup>にべつとりついている生<sup>なまなま</sup>々<sup>ちのり</sup>しい血糊<sup>ちのり</sup>を丹念に洗い落した。それから、電灯の下へ引き返して、両手をひろげて、何べんも裏返して見たり、斜<sup>ななめ</sup>にかざして光にすかして見たりして、指の股や、爪の根元に至るまで、精細に検査した。

ほつとした様子で、彼はぼんやり床<sup>ゆか</sup>の上へ眼をおとした。そこ

には一人の若い女が、見るも無残な殺されかたをして横よこたわつていた。左の乳房の下部、ちょうど心臓の真上と思われるところを、手拭地の浴衣ゆかたの上から、ただ一突きに短刀で突き刺されて仰向けに倒れ、左手はあわてて傷口のあたりをおさえたような恰好になって血の中に埋うずまっており、右手は右の鬢びんのあたりまで上げられたまま硬直していた。下半身もしどけなく取り乱してはいたが、別段ひどい格闘の行われたようなあともなく、急所をねらったただの一突きで即死したものらしかった。

凝じっ乎と見つめていると、軀幹くかんとほぼ直角につきさされたままになっっている短刀の柄つかが、かすかに動いているようにも見えたが、その実、傷口の周囲おびただに夥しく流れている血液の表面にはもう大き

な皺<sup>しわ</sup>ができていた位だから、被害者が兇行を受けてから、既<sup>すで</sup>に少なくとも一二時間を経過していることは確実であつた。

男はくるりとうしろを向いて押入れの襖<sup>ふすま</sup>をあけ、メリンスのかけ布団を一枚出して、ふわりと屍<sup>しがい</sup>体の上にかけた。短刀の柄のところが少し凸<sup>とつしゅつ</sup>出してはいたが、何も知らぬ人が見れば、まるで、疲れてぐっすり熟睡しているように見えた。

突然、男は屍体のそばに膝をついた。そして、如何<sup>いか</sup>にも感慨にたえぬような様子で、被害者の蒼<sup>あお</sup>ざめた額をさわったり、ほつれ髪をかき上げたりしていたが、やがて、死人の顔とすれすれのところまで自分の顔をもつて行つて、まるで生きた恋人同志がするように、死人の唇に、ものの五秒間も接吻していた。男が顔をあ

げたとき、彼の両眼には大きな涙が浮んでいた。涙は頬を伝つたわつて死人の冷たい顔の上へ二三滴落ちた。

不意に、何か容易ならぬことを思い出したものと見えて、男はすつくと起たちあがった。そして、まるで弾ばね機をかけられた人形のように、非常な敏捷さをもつて活動しはじめた。長火鉢の抽斗ひきだし、鏡台の抽斗、それから戸棚の抽斗を次々にあけて、隅から隅まで、併しかし、非常にすばやく彼はしらべはじめた。それがすむと、室内をきよろきよろ見まわしながら、何べんも行ったり来たりして何物かを探している様子だったが、そのうちに、ひとりでに弾ばね機がゆるんだような工合ぐあいにぱったり活動をやめて、茫然と部屋の真中に棒立ちになったまま太い吐息を洩らした。目的物はどうとう見

つからなかつたらしい。

男はもう一度屍体のそばにひざまず跪いて、前と同じように被害者の顔のそばへ自分の顔を寄せて、そつと頬と頬とをすりあわせていたが、やがて、力一ぱい女の顔を自分の頬におしつけた。死人を相手にしてのこれ等らの凡てすべの動作は、全くの沈黙のうちに行われたのであつた。

やがて男は、受持の役割を無事にすまして舞台裏へ退場する俳優のように、落ちつき払つて玄関の間まへ出て、帽子をかぶり、玄関に腰をかけて靴を穿はこうとした。彼の視神経は忽ち緊張し、彼の視線は急速度で旋廻せんかいする探照灯のように前後左右へ旋廻した。靴がないのだ。たしかに靴脱台くつぬぎだいの上へ脱いでおいた筈の靴が、

影も形もなくなっているのだ。念のために彼は下駄箱をあけて見たが、無論そんなところへ靴がひとりでに移転している筈はない。土間には、平常履きの女下駄が一足脱ぎすてあるばかりだった。やつと回復した彼の落ちつきは、この思いがけない出来事のために根柢こんていから覆えくつがされてしまった。しかも、気がついて見ると、たしかにしめておいた筈の玄関の戸が開けっぱなしになっているのである。

——きつと誰かこの戸をあけて、どっかの隙間から自分の行為を見ていたに相違ない。そいつが、靴をかくして自分をまごつかせてやろうとたくらんだのだ。ことによると、もうおもてには警官が待ちかまえていて、自分が一步門外へ足を踏み出すが早いか、



自分の手には鉄の手錠がはめられるような手筈になつてゐるのかも知れぬ——こういう疑いが、稲妻のように彼の頭を横つて過ぎた。手頸に冷たい金属が触れたような感覚さえおぼえた。彼は急いで女下駄を爪先<sup>つまさき</sup>にひっかけて、夢中でおもてへ飛び出した。

意外にも、そこには何の変つたこともなかった。彼は張り合抜けがしたような気のゆるみを感じたが、それでも矢張りまんべなく周囲に気をくばりながら、路地を抜けて通りへ出た。

暮れて間もない山吹町<sup>やまぶきちょう</sup>の通りは、いつものように大変な人

出であつた。夜店商人<sup>あきんど</sup>のまわりには用もない通行人がたちどま

つて、そこここに人垣をつくつており、夜店などには眼もくれな  
い連中<sup>れんじゅう</sup>が、両側の人垣の間を、ひっきりなしに次から次へと

往き来していた。こういう人ごみの中へ出てしまうと、彼の真<sup>ま</sup>蒼<sup>お</sup>な顔も人眼をひく程目だたなくなり、背広をきて女下駄を穿<sup>すべ</sup>いている妙な恰好にも誰一人注意する者はないらしかった。凡て<sup>すべ</sup>が、普通であり、何等<sup>なんら</sup>異常な点はなかった。つい数十歩はなれた路地に酸鼻<sup>さんび</sup>を極めた悲劇が起っていることを思わせるような何物もなかった。大都会という巨大な存在には、あれ位な出来事は皮膚の上へ一片の埃<sup>ほこり</sup>が落ちた位の刺戟<sup>しげき</sup>しか与えないのだろう。ことによると、東京市内に、これ位な事件は、現在二十も或いはそれ以上も起っていて、しかも誰一人それに気がついていないのかも知れぬ。

しかし、彼自身は大都会そのもののように無感覚ではあり得な

い。彼は昼<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>銀行の前まで来ると、筋向いの靴屋のショーウィンドウの前に立ちどまり、その中から自分が前に穿いていた靴によく似た一足を物色して、中へはいつてそれを買つて穿いた。靴屋の小僧は、彼の風体などには全く無関心で、まるで洋服を着て女下駄をはいているのは極<sup>ごく</sup>普通の服装でもあるかのように、少しも平常<sup>ふだん</sup>と變つたところはなく、愛嬌よく、しかも非常に事務的に新聞紙で下駄を包んで彼に渡した。彼は、江戸川橋<sup>えどがわばし</sup>の上からそつと下の川へその包みを投げすてて、急いでひき返して電車にとびのつた。

証拠をのこさないように非常に用心したに拘らず、既に二つの重大な手落ちをしたことがひどく彼の気を腐らした。一つは、昨日被害者に出した手紙をどうしても発見することができなかったことだ。昨日の夕方丸の内まるうちでポストへ入れたのだから、今日の午前中にあの手紙はついている筈だ。して見ると九分九厘くぶくりんまではあ家のうちの中にその手紙はのこっているに相違ないし、家の中にのこっている以上は、おそかれ早かれ臨検りんけんの警官に見つかるにきまつている。しかもその手紙には、今日の夕刻役所からの帰りにあの家へ立ち寄るということが記しるされてあるのだ。

彼は電車に乗って間もなくしまったと思った。あの手紙は女が

懷中か或は袂の中へ入れていたのにちがいないということが気がついたのである。女の身のまわりを探さなかったことは何という取り返しのつかぬ不覺だったろう。彼には、被害者の襟えりもと元から、水色の封筒のはしがはみ出しているのが、まざまざ見えるような気がした。ほんとうにそれを見たようにさえ思われ出して来た。おまけに、何よりも困ったことには手紙の用箋に役所の用箋をつかったことだ。

いま一つの手落ちは、何者かが玄関の戸をあけて靴を盗んで行ったのに気のつかなかったことである。玄関と居間との間の襖はしまっていたから、中の様子が玄関から見えるわけではないけれども、彼は靴を盗まれても知らずにいた位だから、どんな隙間から

のぞかれていたか知れたものでない。靴を盗んだ奴は、靴をかくしておけば逃げ出す心配はないと単純に考えて、その間に交番へかけつけて一部いちぶしじゅう一什を巡査に訴えたのかも知れない。そうだとすると彼は電車道までの帰りがけに、急をきいて現場へかけつける巡査とすれちがったのかも知れないことになる——考えただけでも彼は背筋が寒くなった。

——それにしてもあの女はかわいそうなことをしたものだ——彼の頭は急に別なことを考えはじめた。うえのひろこうじ上野広小路しんめいちよで神明町う行きに乗りかえてから、にわか俄に混雑して来た電車の中で、彼は過去二年間にまたがる、被害者との関係を次から次へと回想しはじめた。

関係！ といつても、まことに他愛のないものではある。思春期の男子に通有の、一種の女性崇拜とでもいった心的状態が、偶然に崇拜の対象として彼女をとらえたまでだったのだ。一体男子がこういう心的状態にあるときは、崇拜の対象となる女性には殆ど資格はいらないと言つてもよい。ただ人なみの容貌とほんのちよつとしたインテリジェンスの閃めきとをさえもつておればそれで沢山だ。大宅——これから彼の本名で呼ぶことにしよう——大宅三四郎は、その頃法科の三年生だった。女は朝吹光子といつて、その頃浅草雷門のカフェ大正軒の女給の一人だったのである。

大宅は十数人の女給の中で、どういふわけか光子を崇拜の対象

としてえらんだ。彼女は別に他の女給に比してすぐれた点をもつていたわけではないが、笑うとき両頬に笑くぼがえできることと、滑らかな関西訛りとがことによると大宅の氣にいったのかも知れぬ。が実は大宅自身にだって、なぜ特に彼女が氣に入つたかという理由はわからなかつたのだし、そんなことはわからぬのが当然でもあつたのだ。

はじめのうちは、大宅は、毎週土曜日に必ず、大正軒の一つのテーブル——それも大抵たいてい他の客が既に占領していない限り、入口から三番目の右側のテーブルときまっていた——に陣どつて、好きでもないウイスキーをちびりちびりなめながら、時々光子の姿を見ることが満足していた。二人がはじめて口をきいたのは、



それから約三カ月もたってからだった。それはほんのちよつとした挨拶に過ぎなかったのだが、大宅は有頂天になって、その日の日記のしまいに、今思ひ出すと冷汗ひやあせの出るような甘つたるい詩を書いたことを今でもおぼえていた。

それから、しばらくたつと冗じょうだん戯え口の一つもきけるようになり、とうとう公休日にも一度二人で日帰りで江えの島まで遊びに行つたこともあつた。とはいへその時だつて、彼は、汽車に同席したというだけで手先や膝がふれあうのさえ、不必要に用心して彼の方でさけていた位だった。

外部にあらわれた二人の關係はこんなに淡いものであつたが、心の中はそうではなかった。三四郎には光子のあらゆる部分、あ

らゆる動作が美しく、高貴に、なみなみならぬもののようにさえ見えた。ある時の如き<sup>ごと</sup>は、大正軒の前まで来て、急に彼女にあうのがきまりわるくなって引き返したこともすらもあつた。

三四郎が大学を卒業して××省書記に採用されてからまもないある土曜日の晩であつた。恰<sup>ちやうど</sup>度四月のことで大正軒の広間には造花の桜が一ぱい咲き乱れており、シャンデリヤは部屋一ぱいに豊満な光を投げていた。白いエプロンの襟<sup>えり</sup>に真<sup>しん</sup>鍬<sup>ちゆう</sup>の番号札をつけた光子は、三四郎のそばに立つて一寸<sup>ちよつと</sup>あたりに気をくばりながら低<sup>こゝろ</sup>声で言つた。

「妾<sup>わたし</sup>近いうちにここをやめようと思うの」

芳醇なカクテルにほんのり微<sup>ほろ</sup>醉<sup>よい</sup>していた三四郎は、

「そりや困るね。君が居なくなつちや僕的生活はアメリカ無しのコロンブス同然だよ」と彼はドストエフスキーの文句をひいて不良少年じみた冗じょうだん戯ぎ口調で言つた。

「でもね」と光子は存外真面目まじめで、矢張り四辺あたりに気をくぼりながら低声こゝろえで続けた。「カフエの女給なんてまったく奴隷みたいなも

のよ。主人からお客からもふみつけにされてね。それでいて朋ほ輩うばい同志だつてみんなひがみあっているのよ。口先では体裁のいいことを言っているけれど、女なんて心の中じやみんな仇同士かたきだわ」

日頃からフェミニストをもつて任じていた三四郎は、女からこの現実的な訴えをきいて、虐しいたげられた女を虐しいたげられた状態のまま

に享樂しようとしていた自分の矛盾を恥じた。そして非常に感激して、急に真面目になつて言つた。

「そりやいい決心だ。まったくこういう所に長くいてはよくない。があとで生活に困りやしないかね？」

「……………」

「月にいくらあつたらやつていけるもんかなあ？」

「いくらもかからないと思うのよ。間借りでもしてゆけば」と光子はうつむきながら答えた。

「三十円位なら僕でも出せるがなあ。君さえかまわなければ」

「だってそんなことをしていただいちやすまないわ」

「なあに、君の方さえよければ、僕は是非ぜひそうさして貰いたい位

だ」

こうして光子はカフェをやめることになったのである。大宅は  
実際月三十円の負担と、一人の女性を奴隷状態から救ったという、  
人道主義者の誇りととの交換を後悔してはいなかった。その日か  
ら大宅の生活は一層ひきしまつて彼はふわふわした女性崇拜主義  
者から、堅実な青年に一変したのであつた。それまでだつて、二  
人の間の関係はきれいなものではあつたが（勿論<sup>もちろん</sup>心の中まで彼  
がピューリタンであつたわけではないが）その後は益々きちよう  
めんになって、光子が山吹町の路地に六畳に三畳の借家<sup>しゃくや</sup>ずまい  
をするようになってから今まで、手紙の往復以外に、二人が直接  
会つたことは今夜とでも三度しかなかった位である。金で女に恩

を売ったように思われることを極度に警戒して彼は避けていたのだ。

二人のこれまでの関係を知っているもの——或は誤解しているものと言った方が適當かもしれぬ——は世界中に一人しかない——少なくとも大宅はそう信じていた。それは、大宅が役所へつとめてから間もなく田舎いなかの女学校を出て上京してきた、許いいなずけ嫁よの子しこだった。大宅は嘉子と同棲する前に、そうするのが義務であると信じて、すっかり光子との従来の関係を彼女に平気で告白してしまったのであった。その時嘉子の顔がさつと曇ったのを大宅は今でもよく記憶していた。

光子からはその後時々手紙がきた。二人は会った時はいつも淡

白にわかれたが、手紙ではかなり濃厚な文字をつらねることもあった。まるで普通の男女間の交際の公式の反対なのだ。それで光子からその手紙がつく度<sup>たび</sup>に、嘉子の心が平らかでなかったことは、言うまでもなかった。嘉子は明か<sup>あきら</sup>かに二人の関係を誤解しているのだし、誰だつて誤解するにきまつたような関係でもあつたのだ。

ことに、昨日の朝着いた光子からの手紙には、是非今日会つて話したいことがあると書いてあつたので、それがもとになつて、彼が光子にまだ仕送りをつづけているのはあまりに嘉子をふみつけにしたしうちだと、嘉子が涙ぐんで食つてかかつたのをきつかけに、今朝<sup>けさ</sup>、役所へ出がけに二人は同棲後はじめてひどい喧嘩<sup>けんか</sup>をしたのであつた。三四郎の方では、光子に対して何等<sup>なんら</sup>疚<sup>やま</sup>しい関係

はないということ、男子が一たん約束をした以上は、何とか相手の身のふりかたがきまるまでは約束をやぶるわけにはゆかないことを意地になつて言い張つたので、とうとう喧嘩別れになつたままで彼は出ていったのであつた。嘉子は嘉子で「これから妾<sup>わたし</sup>が光子さんに会つてじかに話をきめてきます」と捨台詞<sup>すてぜりふ</sup>をのこして三四郎にわかれたのだつた。

ところが三四郎が役所から帰りに光子の家へ来て見ると、光子はもう屍体となつてしまつていたのだ。



光子の屍体を見出した瞬間から、大宅三四郎の頭には、どうしても抹殺まつさつすることのできない疑いが執拗しつように巣くった。彼はこの疑いに触れることを恐れて、わざと避けていたのであるが、避けようとすればする程、益々はつきりとした形を帯びてくるようにすら思われた。

彼は自分の家へ入るのを恐れた。——嘉子はもう帰っているだろうか？ どうしているだろう。犯した罪の恐ろしさに泣きくずれているのじゃなかろうか？ もう既に警官に発見されて引致いんちされたのじゃなかろうか？——

まるではじめの家を訪れる時のように、彼はしばらく我が家の前に佇たたずんで思案をこらしていた。家の中は森閑しんかんとしていて別

に変わった様子もなかった。とうとう彼は思いきつてぐりを開けた。

玄関へ迎えに出た嘉子の態度にはひどく平常ふだんと変わった点はなかった。ただいつもとちがっている点は、殆んど口かずをきかないこと位だった。しかし、それは今朝役所へ出かける時に傷つけられた感情の余勢と見る方が自然な位であつた。

「まあどうしたんでしょう」大宅の脱いだズボンをたたんでいた嘉子は、突然吃驚びっくりして叫んだ。「おズボンに血がついててよ」

「えっ」と血相をかえて大宅は叫んだ。なる程ズボンの膝のところに、まだ生々しい血のりがついていた。あれだけ用心をして来たのに、家へ帰るが早いかこんな大手拔かりを発見されたことは、

彼の心をひどく萎縮させた。彼はまごまごしてしまつて、血のついたわけを説明する口実を見出すこともできなかった。

「どうしてそんなもんがついたのかなあ、とに角汚いからよく洗つといておくれよ……それから、今日誰か訪ねて来なかつたかい？」と彼はなるべく自然に話頭をわとう転換しようとした。

「ええ別にどなたも……そうそう、そういうば夕方ちよつとお巡まわりさんが来ましたわ」

「何、巡查が？」

「ええ、ずいぶん人の悪いお巡りさんよ。わたしのことをいろいろ根掘り葉掘りきくんですもの」

「どんなことをきいたんだ？」

「……………」

「なんてきいたの？」

「御主人とどういう関係ですかなんてね。妾返事<sup>わたし</sup>に困っちゃったわ。だってまだ籍ははいっていないし、姓がちがうから妹だなんて言うわけにもいかないし、仕方がないから親戚のものだって言つといたわ」

「なんだ、戸籍しらべか？ それっきりだったかい？」

「帰りがけににやにや笑っていたわ。きつともう知っているのよ」  
「何を知ってるんだ？」

「……………」

三四郎は思わずにじりよったが、不図<sup>ふと</sup>勘<sup>ふと</sup>ちがい<sup>ふと</sup>で真面目になり

すぎたことに気がついて、あとは笑いにごまかしてしまった。

それつきり二人はだまつて食膳に向つた。今朝の喧嘩のことも光子のことも二人とも一語も言わなかつた。但し三四郎は嘉子の様子をそれとなく注視していた。彼には何もかもが意外だらけだつた。恐るべき罪を犯した筈の嘉子のあの驚くべき落ちつきはどうだろう。ことによると嘉子は何も知らぬのじゃないかしら。いやそんなことは絶対にあり得ない。今朝の彼女の言葉、いま光子のことをわざと一言も言いださぬ点、つとめて落ちついた態度を装っているらしいこと、それ等らの事實は、すべて彼女が犯人だという断定に帰着してゆくのであつた。

——しかし、すんだことはしかたがない。なるべくこの事件は、

このまま秘密に葬られてしまつてくれればよいが、人を殺すというようなことは許すべからざる大罪だが、もとはみんな自分のためだ。自分を愛すればこそ、嘉子はある大胆なことをしたのだ。法網をくぐるのはよいことではないが、あの女が法のさばきを受けるとなると、自分は手を下さずして二人の女を殺したも同然になる。何とかしてこのままにそつとすましてしまいたいものだ――

## 四

三四郎はその晩一睡もできなかった。宵に目撃した惨劇、それ

につながる様々な回想と、臆測とが、次から次へと彼の頭の中を交替して占領するのであった。神経は針のように尖って、ごとりと音がしても、警官がふみこんで来たのではないかと思つてひやりとした。

——嘉子が果<sup>はた</sup>して犯人だろうか？ ——この疑いは特に彼を苦しめた。

——女というものは異常な場合には異常なことをし兼ねない性質をもっている。特に愛する男のためには、想像もできないような残忍性を発揮することがある——とりわけ——彼はバルザックの言葉を思い出した——女というものは、一度別の女のものであった男を愛する場合には、全力を賭<sup>と</sup>して戦うものだそうである。

しかも、彼女の場合がちやうどそれにあたるではないか？

——二人の女が——しかも多感な女が一人の男を奪いあう場合、彼女達は手段をえらばない。どんな残忍な、どんな陰險な手段でもとりかねない。色情のために犯された放火や殺人等<sup>とう</sup>の惨劇は枚挙に<sup>いとま</sup>足りない程ある。——考えれば考える程、恐ろしい疑いは益々具体的な形をとつて来るのであつた。

——元来、女は嫉妬という兇器をもっている。恋することの強い女ほど嫉妬も強い。「嫉妬せざる女は恋せざる女なり」というオーガスチンの言葉を逆にすれば、「恋する女は嫉妬する女なり」ということになる。ところで嘉子は自分を熱愛している。自分を熱愛していることは、光子に対する強烈な嫉妬の存在を<sup>しょう</sup>証するわ



けだ――

嘉子も長く眠<sup>ね</sup>つかなかった。三四郎は嘉子の小さい頭の中で、良心が彼女をせめさいなんであるさまを想像していじらしくなつて来たが、それと同時に、あくまでも自分の犯行をつつんで、表面平気を装うているらしい彼女の大胆さがにくらしかつた。

いずれにしても、光子の家で、へまな証拠をのこして来たことを彼はかえすがえすも後悔した。あれがもとで足がついて、嘉子の犯罪が発覚するようになつたら大変だと彼は思った。もしもの場合には、証拠をのこしておいたのを幸いに、自分ですべての罪をきてやろうかとも考えた。しかし、そんなことをしたところで嘉子の身は矢張り破滅だ。彼女は、自分に罪をきせてたま

っているような女ではない。矢つ張りこのまま何事もわからず、闇から闇に葬られてしまえばよいがなあ――

彼が妄想にふけていているうちに、いつのまにか眠っていたらしい嘉子の唇がその時突然動いた。

「許して下さい、光子さん。あーれ、光子さん――」

三四郎は飛び上るほどびっくりして、

「どうしたんだ、おい」

と次の文句を聞くのがおそろしさに、嘉子の肩の辺を<sup>あたり</sup>つかまえ、揺り起した。嘉子はびっくりして眼をさました。

「ああ怖かった。夢でしたのね。ああよかった。妾<sup>わたし</sup>何か言つて？」

「何かうなされていたよ」

「まあこわかったわ——でも不思議ね。ちようど妾<sup>わたし</sup>が考えていることを夢に見たのよ」

「どんな夢を見たんだ？」

「あなたが気を悪くするといけなから今は言えないわ。ああ恐ろしかった」

彼女はまだ恐ろしさにふるえていた。三四郎も恐ろしさにふるえた。恐怖にとらわれて二人は思わず顔を見あわせた。そして、相手の形<sup>ぎようそう</sup>相<sup>さう</sup>を見て更にふるえた。恐ろしき夜は刻々にふけて行つた。二人は無言のまま夜のあけるのを待っていたが、二人とも明けがたになって、うとうととまどろんだ。

## 五

翌朝、先に床をはなれた嘉子は、玄関に投げこんであつた××新聞の社会面を見たとき、もう少しで卒倒するところだった。

「昨夜牛込山吹町の惨劇」、「被害者は妙齡の美人、犯人の目星つく」という初号活字を交えた四段抜き三行の標題で次のようなことが記されてあつた。

「昨夜十一時、牛込区山吹町××番地朝吹光子（二二）は何者かのために胸部を短刀で突き刺されて惨殺されておるのを発見された。所轄××署よりは、直ちに数名の警官出張し、警視庁はただちに管下に非常線を張りて犯人厳探中である。臨検の警官は既に

有力な証拠品をつかんだらしく、深夜にも拘らず××署を捜査本部としてある方面に活動を開始した模様であるから、本日中には犯人は逮捕される見込である」

「被害者の屍体を発見した隣家の老婆は語る——光子さんの家では十一時にもなるのに、玄関の戸も居間の襖も開けっぱなしになっているので、あんまり不用心だと思つてのぞいて見ますと、光子さんが布団を着てやすんでおられる様子でしたから、二度ばかり呼んで見ましたが返事がないので上つて見るとあの始末なのです。<sup>わたくし</sup>妾は腰を抜かしてしまつてしばらくは言葉も出ませんでした。」

「被害者の身許は不明であるが、近隣の人々の話を総合したところ

ろでは、本年四月まで浅草雷門前のカフェ大正軒に女給をしていたということである」

「記者は逸早く大正軒を訪い生前被害者を知っていたという女給百合子についてただと、百合子は『まあ光子さんが人手にかかつて?』とおどろきながら語った。『あの人は人にうまれるようなかたじゃないのですけれど、こちらに勤めておられる時分から色々なお客様と関係があつたようですね。何でも学生の方が二人と、たしか木見さんとかいう請負師の方と、それから、大宅さんとかいってこの春からお役所へつとめておられる方とが、よく見えたように思います。そして噂によると、その請負師のかたと今の所に同棲しておられたということですね」

「被害者の懷中より一通の封書と一通の電報とが発見された。封書の差出人は単に〇生とあるのみであるが、被害前日の日附にて、『明<sup>みょうにち</sup>日<sup>にち</sup>夕方<sup>みづか</sup>歸りに寄ります』という文句が認め<sup>しめた</sup>られてあり、用箋には××省の用箋が使用してあつた。大正軒女給の言つた大宅某と同一人であろうと記者は察する。電報は、名古屋<sup>なごや</sup>駅発信で、発信時刻は当日午前七時二分、受信八時二十分で電文は『キユウヨウアリチュウオウセンニテマツモトヘユキアスアサイイダマチツクキミ』となつている。電文の末尾にあるキミとは請負師の木見のことではなからうか」

「屍<sup>しがい</sup>体にはメリンスの掛布団をかけて一見眠つてゐるように見せかけてあつた。兇行の発見を長びかすための犯人の小細工らしい。

現場は非常に取り乱され、たんす 箆筒、鏡台等のひきだし 抽斗はのこらずひき出して中味はまぜつかえしてあつたが、紛失物もない模様であるからこれまた 亦強盜の仕わざと見せかけるための犯人のきけい 詭計らしい」

「同夜、山吹町ではきもの 履物専門の空巢ねらいが逮捕されたが、同人は、被害者宅にてキツドの赤靴を一足盗んだという奇怪な陳述をしているので取調中である」

新聞の記事は大体以上のようなものであつた。嘉子は靴のところを読んだときに思わず、昨夜大宅が玄関に脱ぎすてたままになつていた靴に目をやった。それはまだ買いたての新しい靴であることが一目でわかつた。

——靴——ズボンの血——××省の用箋——大宅——嘉子は咽の



喉が<sup>ど</sup>つまつてもものが言えなくなつた。

「おい、新聞を貸して御覧<sup>ごらん</sup>」

いつのまにか、三四郎も起きて、嘉子のうしろにたっていた。嘉子は思わず新聞をかかえた。

「お見せというに、何か出てるんだろ」

嘉子の全身がわなわな<sup>ふる</sup>慄えているので、大方の事情を察した三四郎は、つとめて冷静を装いながら追窮した。

「すみません、すみません……」

と言いながら、嘉子は新聞をそばにおいたままとうとうその場に泣き伏してしまった。

三四郎は非常に緊張して新聞の記事を読みおわった。彼は、自

分に嫌疑がむいて来ることはもう覚悟していたのであったが、それでも新聞の記事を読むと、どうぶる胴慄いがとまらなかつた。が新聞記者が嘉子に少しも嫌疑をかけていないのを発見してほつとした。やっぱり嘉子ではないのかなと思つて彼は嘉子の方をちらりと見た。嘉子はまだ顔をふせたまますすりないていた。矢張り嘉子だ。「すみません」とたつた今彼女が言つた言葉の意味が、彼にははつきりとわかつたような気がした。

二人は互に相手の言葉をおそれた。慰さめることも、責めることも、あえといただすことも敢てし得なかつた。ただめいめい自分の胸の中で全てを諒解してだまつていた。

## 六

その朝私立探偵 上野陽太郎<sup>うえのようたろう</sup>は、マドロスパイプをくわえながら、矢来<sup>やらい</sup>の通りの舗石道<sup>しきいしみち</sup>を大股に歩いていった。彼は必要のない時には何も考えないで出来るだけ頭を休めておくということをもットーとしていたので、今もそれを忠実に実行しているらしかった。

朝の新聞で光子殺害の記事を見て、彼は大急ぎで山吹町の兇行の現場へかけつけ、約二十分ほどの間、現場を精細に観察したり、見張りの警官に二三質問したりしてその場を引き上げ、これから今度の事件の捜査本部になっている×××警察署へ行くところな

のだ。現場の視察からは彼は新聞紙に報道されている以外には、何等新しい証拠をつかめなかったらしく、ただ古新聞を一葉拾つて来ただけだった。

「何かかわったことが見つかりましたかね？」

上野の名刺をもつて出て来た××署の佐々木警部ささぎに向つて、

彼は一寸ちよつとパイプを口からはずしてたずねた。

「そうですね。」と佐々木警部は相手にも椅子いすをすすめながら、

自分も椅子に腰を下して徐ろおろに言った。「例の手紙の差出人がや

つとわかりましてね、これから検挙に向うところです」

「すると差出人は新聞に出ていたのとはちがうんですな？」

「そういうわけでもないのですが、何しろ相手が官吏ですからな、

××省へ行つて、本人が果して実在の人物か否かをしらべ、本人の自宅の番地などもききたださねばならず、筆蹟などもよくくらべて見て、愈々いよいよそれにちがいないことをたしかめるには、新聞記者があてずっぽうに書きなぐるのとはひまがかかる点は認めていただきたいですな」

「でその大宅という男に嫌疑がかかっているわけですか？」

「まあそうです。」

「ほかに何か新しい材料は？」

「別に……そうそう、今朝被害者宛に電報が来ましてね。発信人は矢張りキミという男で、甲府こうふの駅から打っているのです。今朝の四時二十分の発信で、配達されたのは六時半頃だったそうです。

文面はたしか『一〇ジ二一フンイイダマチツクエキマデムカイタノムキミ』となつてゐるんです。かわいそうにその男は情婦が殺されたのも知らずに歸つて来てさぞ吃驚びっくりすることでしょう。しかし、この男をといただして見れば、被害者の身許や、大宅との関係などもとと詳しくわかるかも知れませんか、証人として直ぐに引致する手筈になつてゐます。それに今のところ屍体の引取人もありませんから」

上野探偵はポケットから時計をとり出して見ながら言つた。

「十時二十一分に飯田町いいだまちへつくんですね。で木見という男の人はわかつてゐるんですかい？」

「そりや大正軒の女給の話でわかつてゐますが、念のためにその

女給に駅まで行つて貰うことになっています」

「そりやよかつた……ではもうすぐ十時ですから、私もちよつと駅まで行つて見ますかな、ここから歩いて行つてもまだ間にあいますね。ああそうそう。忘れていたが、手紙と電報とは矢張り被害者の懷中にあつたのですな？」

「懷中と新聞にあるのは間違いで、袂の中にあつたのです」と佐々木は新聞の報道の杜撰ずさんを証明するのはこの時だとばかり少しそり身になつて言つた。

「手紙の封筒に血で指紋がのこつていたというのはほんとうですか。今見張りの警官にきいてきましたが？　しかも指紋は被害者の指紋ではなかつたということですか？」

「そのとおりです」

「被害者の家の状差しは空っぽでしたが、あの中には屍体が発見された時から手紙類は一つもはいつていなかったのですか？」

「そうです」

上野はポケットから一葉の古新聞をとり出して警部に渡した。

「現場でこれを拾って来たのですがね、何かの参考になるかも知れませんかからお渡ししときましょう」

佐々木警部は小さく折って折り目の大分<sup>だいぶん</sup>すれている××新聞を、大急ぎでひろげてずっと標題<sup>みだし</sup>に眼をとおしながら言った。

「昨日の新聞ですね、これは、何か変ったことでもでているのですか？」



「六面をよくごらんさい。」

「ほう、これは静岡版ですな。ここに何か出ているのですか？」

佐々木の視線はいそがしく活字の上を走った。

「何も出てはいないのですが、犯人が昨日静岡県からか、若しくは静岡県下の駅を通過して東京へ来たものだということがこれでわかるじゃありませんか？　東京ではこの版は売っていませんからね。ところで、私は時間がありませんから、ちよつとこれから駅へ行つて見ます」

こう言いながら上野探偵は麦藁帽子むぎわらを被かぶつて、急いでおもてへ出た。

## 七

上野は駅へつくと先ず<sup>ま</sup>売店で旅行案内を一冊買った。

待合室には二人の知りあいの刑事が、一人の若い女と笑いながら何か話していたが、上野の姿を見ると、「あつ上野先生だ」と言いながら起<sup>た</sup>ちあがつてお叩<sup>じき</sup>頭をした。

「貴女<sup>あなた</sup>が百合子さんですね？」探偵は女の方へむきなおつて言つた。「はあ」と女は低<sup>こひそ</sup>声で答えた。

「今汽車がつきますから、貴女は相手に見られないように僕のうしろにかくれていて木見という人間を私に教えて下さい。それから、あの男は山吹町の被害者の家へまっすぐに行くにきまつてい

るから、君達も仰ぎようぎよう々しくここであの男を引致するようなことはしないがいいぜ」と上野は二人の刑事に向つて言つた。

そのうちに汽車が到着した。駅の構内は急にざわざわした。二人の刑事と上野とは改札口の近くに並んで立っていた。百合子は上野のうしろに身をかくして、二人の男の肩の間から眼だけ出して、改札口から出て来る人々を熱心に見張っていた。

「あれですよ。あの赧あから顔の肥つた男です」と言いながら、彼女は上野の背を指でつついた。

四人の眼は同時に百合子が今説明した人物にそそがれた。

彼は、赤帽からトランクを受けとるや否や、急いで車をやとつた。『山吹町』という声を四人ははつきりときいた。

「君たちはこれからタキシードあの男をつけて行きたまえ。そして向うでよく様子を見た上で、突然逮捕するんだ。早すぎてもおそすぎてもいけないよ。十分位様子を見ていたまえ、僕が署長には伝えておくからその点は心配ないよ。だが抵抗するかも知れんから、用心して四人位でかかるがいいよ。百合子さんはどうも御苦労でした。さあこれから私たちは本部へ帰りましょう」

飯田町駅から二台のタキシードが飛んだ。一台は山吹町へ、一台は×××署の方向へ。上野はタキシードの中で、非常に敏捷に旅行案内のページをめくって、しきりに手帳に数字を写し取っていた。自動車が署の前でとまると、上野は急いでとびおりて佐々木警部の室<sup>しつ</sup>へかけこんだ。

「大宅はもうつれて来ましたか？」

「もう帰つて来る時分です」と佐々木は柱時計を見ながら答えた。上野はいそいで言葉をつづけた。

「木見という男は山吹町へ行きましたから、貴方あなたの部下の刑事たちに様子を見せにやりました。大成功ですよ。もう三十分のうちに犯人は逮捕されます」

「いや、もう既に逮捕されてしまっているのです、ほら帰つて来ました」

一台の自動車が××署の構内へ徐行してはいつて来た。中からは私服刑事が四五人もぞろぞろ出て来た。一番あとから、真蒼な顔をしておりて来たのは大宅三四郎であつた。

大宅はすぐに一先ず留置所へ入れられた。「よく逃げようともしないでまごまごしていたね」と佐々木警部は一同を見まわしながら上機嫌で言った。

「ちようど役所へ出るところだつて言つてました」と一人の私服が汗を拭き拭きまるで自分の手柄のように言つた。

「れこに泣かれたのは弱つたなあ」と第二の私服が小指を出しながら、第三の私服に向つて内<sup>ないしよ</sup>密で言つた。「かわいそうに、これによるとあの女も一生後家<sup>ごけ</sup>さんで暮さにやらんぜ」

「あの男には細君があるのかね？」と二人の会話を耳さとくききつけた上野探偵は、突然第二の私服にたずねた。

「細君かどうかは知りませんが、きれいなのがいました。別れる

ときに泣いて困りました」

「ふん」と言いながら上野は手帳の紙を一枚引きさいて、鉛筆を出して何か書きつけていたが、やがて、給仕をよんで、「君すまないが電報を一つうって来てくれ給え。至急報でね」と言いながら件の紙片<sup>くだん</sup>を渡した。それから佐々木警部に向つて、「今の男の住所をちよつとこの子供に教えてあげて下さい、たしか田端<sup>たばた</sup>でしたね」と言つた。佐々木はその通りにした。

上野探偵が給仕に渡した紙片には「オオヤクンハムザイ、キヨウジユウニホウメンサルアンシンセヨ」と書いてあつた。

「さて」と上野探偵は佐々木警部に向つて言つた。「もう僕の出る幕はすんだからお暇<sup>いとま</sup>しますかな。しかしちよつと申し上げてお

きたいことがありますから、どうか別室でお話したいと思ひますが」

二人はつれだつて中へはいつた。

「ほかでもないが」と上野探偵は座につくが早いと言つた。「大宅君はなるべく早く家へ歸してあげて下さい。若い細君が心配しとるようですから、どんな間違ひが起らんともしませんからな」佐々木は当惑そうに答えた。

「そりや嫌疑が晴れば歸しますが、今のところではあの男が……」

「いや嫌疑はすぐ晴れますよ。今にほんとの犯人がここへやつて来て何もかも白状しますからね」と上野は佐々木の言葉を途中で



遮さへぎつて言った。

「大宅以外の犯人というのは誰のことです」と佐々木は少し気色けしきばんで反問した。

「先刻さつきも申し上げたように昨日静岡をとおつて帰った男ですよ。

いいですか。犯人は昨日の朝七時二分に被害者に宛てて名古屋から電報を打つて、急用ができたから中央線で松本まつもとへ廻つて翌日東京へ帰ると言つてよこしたのですよ。中央線へ廻つて松本へ寄つたりしておれば、昨日中に東京へ帰ることはできませんから無理もないですね。ところが警察医の検証によると被害者が兇行を受けたのは昨日のまだ明るいうちだということでしょう。一寸見ると犯人のために立派にアリバイが成立しているですね。ところ

が、その実彼は、電報をうったあとで七時二十分名古屋発の汽車にのつて東海道線で真つ直に東京へ帰つたのです。静岡か沼津かの辺で新聞を買つてね。その汽車が東京へつくのは四時五十分です。すればそれからすぐ電車で行けば明るいうちに山吹町まで十分行けるじゃありませんか。きつとあの男は東京駅から中央線に乗りかえて牛込駅まで行つて駅にトランクを預けておいて、それから江戸川橋まで市内電車であつたにちがいありません。兇行は無論前から計画してあつたので、それからすぐに予定どおりに行われたのでしよう。兇行をおえると犯人は、現場に証拠をのこさないようにと用心して状差しにさしてあつた手紙類をすっかり火鉢の中で焼きすてたのです。そしてただ、自分が名古屋か

らうった電報と大宅が当日被害者の家へ来るといつて寄越した手紙とだけを取りのけて、それを被害者の袂の中へ入れておいたのです。勿論、電報の方はその男の現場不在証明になるし、手紙の方は大宅の方へ嫌疑がむくようになるからです。これは犯人の指紋をしらべて見ればすぐわかります。火鉢の中には実際手紙を焼いたあとがありましたよ。私は先刻よく見てきました。それだけ用心しておきながら犯人の大手拔かりは、手紙の上書に血の指紋を残したこと、静岡で買った新聞を不注意にも現場にのこしておいたことです」

「しかし」佐々木警部はまだ上野の説に不服そうに口をはさんだ。  
「貴方の仰おっしゃ言る犯人というのが木見のことであるなら、あの男

は現に松本へ行つたじやありませんか？」

「どうしてそれがわかりますかね？」

「どうしてつて、今朝甲府から電報をうっているし、現に今飯田町駅へ着いた筈じゃありませんか？」

「なる程、甲府から電報をうったことはたしかです」と上野探偵は平然として答えた。「先刻飯田町へ着いたことも現在私が見て

さつき

きたのですから、これ程たしかことはありません。だが、それだけでは、あの男が松本へ行つたという証拠にも、名古屋から中央線に乗つたという証拠にもならんじやありませんか。あの男は、凶行をすましたあとで被害者の家を抜け出し、それから牛込駅へトランクをとりひき返したのですよ。もっと尤もその間にどつかへ寄

ったのかも知れませんがそれはどうでもよい問題です。まあ御覧なさい」と彼はポケットから旅行案内をとりだしてその中の或る頁を指さしながらつづけた。<sup>ページ</sup>「飯田町を十時に発車する長野行の汽車があります。あの男は牛込駅でトランクを受取つて飯田町まで後戻りしてこの汽車に乗ったのです。この汽車は今朝の二時五十八分に甲府へ着くのです。あの男は甲府で下車してしばらくしてから光子のところへ電報をうったのです。甲府からうった電報の発信時刻は今朝の四時二十分になっておるでしょう。あんな時刻に甲府の駅から電報をうつなんてそれ以外に説明がつかんじやありませんか。それから駅でしばらく待っていて、五時二十分発の飯田町行の汽車<sup>ゆき</sup>である男は東京へひきかえして来たのです。そ

の汽車がちょうどきつきあの男が乗って帰った汽車なのです。あの汽車は甲府から出る汽車で松本とは連絡しとりませんよ。要するに、こんなことをしてあの男は現場に不在であつたことを二重に証明しようとしたのですが、甲府発の四二四号列車に乗つたのは不注意でしたよ。旅行案内を見ればすぐに化の皮があらわれま**ばけ**すからね」

「ふむ」と佐々木警部は茫然として言った。

「その証拠には」上野探偵は言葉をつづけた。「あの男は、わざ**やちゆう**わざ夜中に電報を打ってまで被害者にむかえに来てくれと言つてよこしておきながら、駅へ着いた時、あたりをふりむきもせず、待合室を探しもしないでまっすぐに俵をよんで乗りましたよ。誰**くるま**

も迎えに来ておらぬことをちゃんと知っていたのです。名古屋から打った電報も甲府から打った電報も二通とも貴方がたをまんちや瞞まか着くするためにうったものですよ」

「しかし、何故なぜあの男が光子を殺したのでしょう？」

「それは調べて見ねばわかりませんね。しかしことによると、被害者があの男の現在の秘密か旧悪かを知っているので、どうしても生かしておくわけにゆかない破目はめになっていたのかも知れませんよ。あの男はこの事件以外にも思いもよらん泥を吐くかも知れんと私は思いますね。いずれにしても犯罪が非常に計画的ですから、色情関係じゃなかうと思います」

佐々木警部が、上野探偵の明鏡の如き推理にすっかり説服され

てしまつて、彼を×××署の入口まで送り出して来たのはそれからまもなくであつた。上野探偵が×××署の門を出るとき、すれ違いに木見を乗せた自動車が同署の構内にはいったが、彼はもうそんなものには興味がないといった風<sup>ふう</sup>に見向きもしないで、マドロスパイプをくわえたまま、いつもの無念無想の歩みをつづけて行つた。

×                      ×                      ×                      ×

上野探偵からの知らせで、×××署の前まで三四郎の釈放されるのを迎えに来ていた嘉子が、署の構内から出て来る未来の夫の姿を見出したのはその日の夕方近くだった。二人は感慨無量でしばらく無言のまま顔を見合っていたが、やがて女の方が口をき



った。

「わたし、貴方だとばかり思ったものですから、心配で心配で……」

「僕はまた嘉ち<sup>よし</sup>ちゃんだとばかり思って心配していたんだ。ほんとに嘉ちゃんじゃなかったのだね？」

二人は光子の屍体を引きとることを即座に可決し、その足で光子の霊前にそなえるべく花を買いに行ったのであった。



# 青空文庫情報

底本：「殺意を運ぶ列車 鉄道ミステリー傑作選」光文社

1994（平成6）年12月20日初版1刷発行

1999（平成11）年1月10日7刷発行

初出：「新青年」

1927（昭和2）年1月号

入力：田中亨吾

校正：土屋隆

2001年12月31日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山吹町の殺人

平林初之輔

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>